

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 19 号

発行日
2024. 1. 15
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
(井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○新年に想う！「辰年」、そして、「年男」でもある！

年が明けて、既に5日！私自身には、いつもと変わらな
い年始なのであるが、実は、今年も、干支は「辰」。だか
ら、一応は「年男」（7度目）なのである！そこで、何か
発奮できるものはないか？そのようにも思ってはみるが、
なかなかその材料が見当たらない？でも、何とかしたい！
否、そうしなければ、さらなる老境へとまっしぐら！！

そんな想いのスタートであったが、一方では、そのよう
な高齢者の戯言？を、のつけから、しかも一瞬のうちに打
ち砕いたのが、元日の「能登半島地震」②の後も続いてお
り、被害は甚大なものとなっている！、そして、2日の日航
機と海上保安庁機との「衝突事故」である！どうしてこん
な日に、こんなことが続けて起きるのか（不測の自然災害&
人為的なミス？とは言え、およそ考えられないような事故！！）
命をなくした方、被害に遭われた方々には、本当に何を
言っているのか？言葉にするにも憚れるが、一日も早い復
興（地震災害の方は、まだまだ厳しそうであるが！）、そして、
心の傷を癒されることを祈るばかりである！目を転じれ
ば、相変わらずの、諸外国の悲惨（ウクライナ、パレスチナ・
ガザ地区等）も続いている！他方では、そうした悲報とは
真逆の？、どうしようもない（情けない？）話（政治家のキ
ックバック事件等）も続いている！

いずれにしても、すべての人に「新年」は訪れている！
人の世のはかなさを挙げればきりがないのであるが、生き
ている限り、その「生きる意味」を求めて（探して！）生
きる他ない！それは、「年男」であろうが、「高齢者」であ
ろうが、一切関係ない！そう思っ、歩むしかない！

○娘達（次女・三女）、そして卒業生達との出会い！

上記の痛ましい災害・事故のこともあるので、あまり
個人的なことは書きたくないのであるが、このことは、
是非書き記しておきたい（私の、この通信への思いを分か
っていただいている方には、多分分かってもらえる？）！

ということ、まずは、正月休み（短い日数であつた
が！）に、福岡と岡山に住む次女、三女が、我が家に帰
ってきた！二人とも独身であり年齢は不問とするが！、
いつもながら、幼少期の親子関係を、可能な限り取り戻
そうとするような言動をしている私であるが（神社参り
の際の綿菓子購入等、いつまでこのような光景を見られ
るのか？何とも複雑な思いの昨今ではある！）

次が、最後のゼミ生3人（T君/O君/Mさん）の、年
始訪問（2日）であるが、この学年の若者達には、何度
も書いてきたが、私は、大いに救われた！やけになつて
大学を辞めた私であつたが（それ故に、彼らには大いに迷
惑と心配をかけた！）、その後も変わらぬ思いを持ち続け
てくれているようで、事あるごとに、私の家に顔を見せ
続けてくれている！本当に、ありがたいものである！

これも、かの「教師冥利」ということであるが、こう
した関係がいつまで続くか（賀状も含めて）？自身の間
は、それなりに続くであろうが、所帯を持ったら（少々
古い表現か？）、そうもいかない（ただし、T君は所帯持
ち！子どもも二人いる！）！！彼らを通じた、他の卒業生達
の近況も知れるというおまけ？もある！ついでながら、
年明け直ぐに（午前零時）、「あけおめ」の電話をする、
一つ上の卒業生（S君）もいる（今年もあつた！）！

○今更ながら、「七十にして矩を踰えず」！

これは、古代中国の経書である「論語」を元にした故事成語
であるが、恥ずかしながら、否、迂闊にも、その故事成語自体
の存在を失念していた！「五十にして天命を知る」や「六十に
して耳順う」は、それなりに覚えていて、使ったりもしてきた
のであるが、自らが、その年を迎え、そして超えた今も、つい
ぞ思い出すことはなかったわけである！

しかし、それが、何と昨日（9日）、偶然にも出くわしてしま
つた！しかも、それは、いつのまにか、ネット上で、ある種の
ルーティンワーク化している「難読漢字」の読みの問題から、
それに行き着いた次第なのである！そのルーティンワーク自体
は、一種のボケ防止のために行っているつもりであるが、改め
て、漢字の世界の広さ（奥深さ？）を知らされる時でもあるとい
うことである（初めて見る字も多く、情けなくなる場合もあるが！）
そこでここでは、折角でもあるので、この「七十にして矩を踰えず」
の意を踏まえて、折角でも確認しておくことにしたい！そ
して、果たしてそれに見合う生き方を、今の私がしているのか
どうかを、自己評価してみたい！ちなみに「矩を踰える」と

は、『道徳や規律から外れる』『分を越えた振る舞いをする』
という意味で、どんなに立派な人でも自分の行動を完全にコン
トロールできるようにするのは七十歳くらいになってから」と
いうことらしい（確かにそうだが、それにそぐわない人もいる？）！
それはともかく、今の私は、そのような生き様とはなってい
ると思われるので「最早「矩を踰える」ような生活環境にはない！）、
一応やれやれではある！！ただし、「いくつになっても成長でき
ると信じつつ」生きられれば、それはそれで、さらに結構なこ
とかと思われる（ただし、論語では八十以上はない！！）！

余計なことではあるが、この孔子の言葉については、前にも
述べたかもしれないが、丁度50歳を迎える頃に読んだ、井上
靖の『孔子』（1989年の第42回野間文芸賞受賞作）のことが、
改めて思い出される！「五十にして天命を知る」の「天命」の
ことであるが、何故か、その小説を読んで、大いに納得させら
れたことを覚えている（多少？通説とは違った？）！（井上）

○3月16日(土)、いかなる「出会い」となるか?!

ひよんなことから、以前から実現させてみたいと思っていた交流が出来そうである(3月16日(土)午前。形は、「インタビュール・フォーラム」という名のズーム交流。ただし、タイトルは未定！それは、今、沖繩で頑張っている4人の、NPO法人・一般社団法人の職員(MJさん・MSさん)公民館受託者/MHさん・Yさん)青少年の家・児童館受託者)と、長野県泰阜^{やまがた}村で、NPO法人グリーンウッド自然体験教育センターを運営しているTさん(代表理事)とのコラボ交流である！

願いは、長野のTさん(達)がやってきたこと(ひととづくりとまらづくりの循環の究極体現)を参加者全員で共有し(学び)、それを踏まえて、参加者全員の思いと力の結集(仲間づくり・後継者づくり)を、改めて行つてほしいということである(であれば、タイトルは、「ひととづくりとまらづくりの循環」そこには、何が必要なのか?インタビュール・フォーラム…「人」と「思い」の結集!とでもなるか?)!!

現役を退き、ほとんど公的な関わりを辞してきた私であるが、この間唯一の、玉城青少年の家の、自称?「相談役」をやりながら痛感したことは、「教育協働」(「学校教育」と「社会教育」の協働)を実現するためには、彼らのような、傑出した思いと力のある、そして、それを「持続的に」行うことが出来る「人達」(地域や学校、行政を動かしていくプロモーター的人物?)が必要だということである(現実には厳しいが!それ故に、応援したいのである!)!!

今回の面々は、これまで私が出会ってきた関係者の中で(教員や行政以外)、その思いと行動力(企画力も含めて)が抜きん出ている、関係者の、新たな模範(先行く人?)となり得ると評価している人達であり(ある種の役割変換!それは、人事異動のある公務員には限界がある)、世代的にも、そのことが期待出来る人達である(50過ぎと40過ぎの各一人!二層の働き盛り!!そこが、ある意味ミソ!)!ただし、こうしたお節介?は、これが最後とはなる!!

○すべて、「教育」の結果である?!

ところで、こんなことを、今更書いても仕方がない(無力を感じる)が、自然災害や、やむにやまれぬ事情でその人はともかく、多くの犯罪や悪事は、究極のところ、その人間の弱さや欲得の為せる業であることは言うまでもない!どうしてそんな人間が出てくるのか?親や生育環境(家庭や地域社会、学校等)に因を帰することも出来ようが、要は、人の命を奪ったり、迷惑をかけたたりすることは、絶対に許されないという倫理が育っていない?あるいは、それを、いつのまにか無くしている(それが大きい?)!

だから、「教育」は、個々人の「人格の完成」と「社会の良き形成」を目指すものとされるが、いつの世も、これが実現されることはない!!だが、それが分かっている、やはりそのことを諷つていく他ない!そんな無常さを感じるのであるが、それを、多くの人が放棄してしまつたら、それこそカオスである!だから、たとえ無力であつたとしても、それを実現しようとするのが重要なのである!<短歌に託して!いかなるスタートであらうとも!>

- ・いかなるスタートで あらうとも
そこからは始めるしか ないのである!!
- ・父親としての想い そして教師冥利
続く限りは持ち続けたい 感じていたい!
- ・「古希」にだけ目を向け
そこにある「短の」を「暇を」を 失念す!
- ・最後の期待? とは言えそれは こちらの勝手?
でもぶつけてみたい 彼らには!!
- ・弱さや欲得 誰もがもつ
その先導うは 何の所為? そこに「人」あり!

<特別コーナー> 堂本彰夫の古代史旅枕 ⑩<>

○「倭国大乱」は、「鰐族」と「鴨族」の移動(逃亡?)から?!
では、改めてその二つの勢力とは、具体的にどのような勢力なのか?そこで、ここでは、かの「神武東征」のことを、少し冷静に?捉えてみたい!何故なら、それは、時代的には、先号でも述べたように、かの「倭国大乱」前後の話であるからであり、その動き(東征)は、それに伴う、ある勢力(おそらく「鰐族」と「鴨族」!いずれも「海神族」!)の東への移動(逃亡?)を不すものと考えられるからである(ただし、物語自体は創作?)!!
すなわち、北部九州における自らの立場の悪化(「鰐族」の危機?)によつて、東に移動した「鰐族」と「鴨族」(奴国及び一部の伊都国の王族達?)の主流は、まずは言備に逗留し、足守川流域に「吉備王国」を立てた(「鰐族」の進出)意(意)は、他方では「河内」へも進出し、「淀川」を遡り、「近江」で合流するとともに(伊勢遺跡)、その「河内」から「大和川」へも遡り、「大和」へ集結していった(「鰐族」の遺跡)!!

前者が、「前方後方墳勢力」、後者が、「前方後田墳勢力」となっていくわけであるが、徐々に後者が優勢となり、前者の勢力は、北陸・東海、関東方面(そして、一方では、西に向かつて、九州方面へと移動)「回帰」していった(それが、後に「多氏」と呼ばれるものであるが、彼らは、神武の大和の長子「神八井其命」の後裔という位置づけであつた!)!!

ただし、ここでの問題は、西へ向かった「回帰」していった「多氏」が、新倭国(邪馬台国連合)の樹立に、どのように関係していったかである!!最初の建国(卑弥呼)の共立)に関係していたのか?それとも、卑弥呼の死後の「君臣」の擁立に関係していったのか?そういうことであるが、そのどちらかに関わっていることは間違いない(阿蘇の君、火の君、大分の君等)!!
ということ、それに関わるもう一つの問題は、中南部九州に盤踞していた「倭人」(鰐族)と、彼らが、どのように関わっていたかである!!これが分かれば、複雑怪奇な「背振山系周辺」と「高良大社周辺」の状況が、さらに理解できるようになる!!それについては、次号で。(つづく)(堂本) <編集後記> こうして新年が始まったが、寒さの方は改めてこれから?とにかく早く春が来ないかと、めっきり体温調節機能が低下している、そして、昨日(12日)からは、久しぶりの大きな○(腰)に見舞われている7度目の年男(達)である!(井上)堂本